
僕のペットが擬人化したら。。。。

淡緑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕のペットが擬人化したら。。。。

【Nコード】

N2298Z

【作者名】

淡緑

【あらすじ】

兎のうーちゃんを溺愛する少年^{など}那兎。

彼はある日、父親の書斎で偶然見つけた“擬人化のすゝめ”の本に書かれた事をうーちゃんに実践すると…

とある町に佇む一軒家に制服を着た少年が微笑みながら玄関の扉を開け入る。

少年は前髪で目が隠れており、傍から見れば少し近寄り難い雰囲気
を醸し出していた。

彼の名前は^{とみやまなこ}兎耳山那兎——町内のごく平凡な高校に通う高校2年生
の男の子で、異常な程ペットを溺愛している以外は何処にでもいそ
うな学生である。

那兎は靴を脱いできちんと揃えてから家にと、目の前に真っ
白な兎を抱いた少女が立っていた。

彼女は那兎の1歳年下の妹の^{とわ}兎羽——那兎と同じ高校に通う高校1
年生の女の子で、背中まで伸びた黒髪が似合う可憐な美少女である。
だが那兎はその姿——いや、正確に言うなら兎羽が兎を抱いている
姿を見た途端に不機嫌な顔を浮かべた。

「何勝手にモフってるんだよ？うーちゃんを好きにモフって良いの
は僕だけだぞ！？」

「だってモフモフしてて温かいんだもん、それにうーちゃんが『寂
しい、死にたい…』って言ってたから放つとく訳にもいけなかつた
し。」

そう、兎耳山家には一匹の兎が飼われている。

名前はうーちゃん——那兎が偶然立ち寄ったペットショップで一目
惚れし、両親の反対を押し切って去年から飼い始めた。

兎耳山家にやって来た頃は家族に煙たがられていたうーちゃんも今
では毎日の様に家族で取り合う争奪戦が繰り広げられている。

因みに雌で名前の由来は兎のイントネーションを訛らせただけであ

る。

「はいはい、兎の声なんて聞こえる訳ないから。さ、うーちゃんをこっちに渡すんだ。」

「もーお兄ちゃんのケチー！」

「ケチで結構ですよ。僕はうーちゃんと一緒にいられれば誰に嫌われたって構わないし。」

半ば強引に兎羽からうーちゃんを奪還した那兎は階段を上り、自分の部屋へと引き籠った。

那兎がうーちゃんを抱き抱えたままベッドに寝転がると、次第にうーちゃんは彼の胸の中ですやすやと眠り初めてしまう。

流石に無理矢理起こしては可哀想だと思った那兎はゆっくりとうーちゃんを降ろしてベッドに寝かせる。

遊び相手がいなくなり暇を持て余し出した那兎は、退屈凌ぎに父親の書斎にある難しそうな本でも読み漁りに行く事にした。

彼は一週間程前から退屈になると時々父親の書斎にこっそり忍び込んで宝探し気分で色々物色している。

と、言うのも二週間前に彼の父親が転勤で旅立ち長期の不在となったお陰で書斎に容易に忍び込めるようになったからである。

書斎の本棚には図鑑や英文で書かれた本等様々な物があり、那兎はその中から適当に一冊取って開いてみるがページに専門的用語ばかりが羅列された本だったので読むのを諦める。

ふと彼が本棚の下に目をやると、明らかに他の本とは違う随分と古ぼけた真黒な本を見つける。

彼はその本を手にとると霞んだ文字で“擬人化のすゝめ”と書かれ、開けられないよう鎖で固く縛られていた。

“擬人化のすゝめ”と書かれたその本に興味を持った那兎は自分の部屋に持ち帰り、机の引き出しからペンチを取り出し本を縛っている鎖を断ち切ろうとした。

だが鎖は堅城の如く鉄壁で全く千切れない。

思い通りにならず憤慨した那兎は本を思い切り床に叩き付け、不機嫌な顔でベッドに寝転がった。

すると本は次第に浮遊し、眩い光と共に鎖が解き放たれた。

余りにも不可思議な光景に那兎は口を開けたまま呆然としていると、本は独りでに彼の手元に舞い降りページを開く。

何故かそのページのみ他のページと違い緑色でほんのりと甘い匂いが漂って来る。

「何々…このページを細かく刻んであなたのペットに食べさせれば人の姿に変える事が出来ます…？」

摩訶不思議な文章に那兎は思わず首を傾げて朗読した。

那兎は半信半疑ながらも記述されていた通りページを細かく刻み、眠っているうーちゃんの背中を申し訳無く思いながら擦って起こす。首をぶるつと振るわせて目覚めたうーちゃんを那兎はよしよしと頭を撫で、餌に細かく刻んだページを混ぜ手の平に乗せて食べさせる。うーちゃんは餌を食べ終わっても尚、那兎の手の平をぺるぺると舐めていた。

もしかするとうーちゃんにとってはあのページが余程美味しかったのでもっと食べたかったのかも知れない。

「うーちゃん、擦りたいよ…？…ってあれ？何も変わらないなあ。まあ当たり前だよ…もし本当に人になっちゃったら大変だし…」

それから数時間後、晩御飯を食べて部屋に戻っても風呂から上がり部屋に戻ってもやはりうーちゃんに何の変化も現れない。

諦めて那兎は部屋の明かりを消し、うーちゃんと一緒に布団の中へ潜り就寝した。

翌日、カーテンから差し込む朝日に照らされ普段より早めに目覚めた那兎は何か柔らかい物に顔面を圧迫され息苦しさを感じた。

嫌な予感がした那兎は恐る恐るその正体を確認すると綺麗な白髪から長い耳、お尻から丸い尻尾を生やした白い肌の少女が全裸ですやすやと眠っているではないか。

その美しい姿を見た那兎は自分の目を疑い、近所迷惑な声で叫ぶ。

「うわあああああああ！だ、だだだ誰だよっ！君はっ！？」

「…？」

少女是那兎の叫び声で目を覚まし、驚いた顔で自分の手足を動かす。そう、この少女こそ“擬人化のすゝめ”の本によって擬人化したうーちゃんである。

2人は驚いて互いを見つめ合っていると、ご機嫌斜めの兎羽が目をごしごし擦りながら部屋の扉を開けて入って来た。

兎羽は鬼の形相をして右手に大きなフライパンを握っている。

「もーお兄ちゃん朝からうるさー！お…お兄ちゃんの変態！お母さんー！お兄ちゃんがっ！お兄ちゃんの変態になっちゃったあああ
あ！」

「兎羽！？誤解だ！これはその…お兄ちゃんの友達…友達だよ！？」

「や、やっぱり変態だあっ！お母さんー早く来てえええええ！」

結局那兎は妹の誤解を解く事は叶わず緊急で家族会議が開かれた。並び座る兎羽と母親是那兎を蔑む様な目で睨み、室内には殺気が満ち溢れている。

因みに母親の名前は瘕^{いと}兎——とても2人の子供を産んだとは思えない程外見が若く、見た目だけなら20代前半ぐらいだろうか。

一方で那兎は畏縮して俯き溜め息を吐き、横目でちらちらと隣に座るうーちゃんを見ていた。

勿論全裸では目のやり場に困るので彼女には兎羽の服を着せてある。彼女は陰悪なムードに包まれている兎耳山家の面々を余所にきよろきよろと物珍しそうに辺りを観察し目を輝かせている。

いつまで経っても白状しない那兎に痺れを切らした兎羽は持つていた包丁を彼の首元に向け、につこりと微笑んだ。

追い詰められた那兎は大人しく白状せざるを得なくなり、震えた声で語り始める。

「はあ…信じて貰えないと思うけどさ、昨日変な本を使ったらうーちゃんが朝には人間の姿に変わっちゃってたんだよ…僕も最初は誰か分からなかったんだけどね…」

「お兄ちゃんつたら見え見えの嘘付いて！正直に彼女って言えばいいでしょ！？もうお母さんも黙ってないで何か言ってよー！」

「…え？ええ…でも頭から耳生えてるし…多分嘘じゃないわ…」

瘕兎は青褪めた顔でうーちゃんを見つめながら呟いた。

しかし兎羽はどんなに説明しても那兎の話を全く信じようとはせず、遂には泣き崩れてしまう。

何かうーちゃんだと証明出来る物は無いかと那兎は知恵を絞り思考している。とふとあの本が頭に浮かぶ。

那兎は2人に少し待つように言い、自分の部屋から“擬人化のすゝめ”の本を持って来て堂々と兎羽の前に差し出した。

兎羽は徐にその本のページをぺらぺらと捲り一通り目を通すと、凍り付いた様に動かなくなった。

那兎が彼女の顔の前で手を振ったり面白い顔をしたりしても無反応、けれども微かな声だけは僅かながらに聞こえて来る。

「これって…」

「？何だよ、はつきり言つてよ。」

「こんなの読める訳無いでしょお兄ちゃん！一体何処の国の文字なの！？」

「どれどれちよつと見せて…ってちゃんと日本語で書かれてるじゃないか。もー嘘付くなよー。」

「もう良い！お兄ちゃんなんてお兄ちゃんじゃない！変態…そう、これからは変態って呼んでやる！」

確かに兎羽が本を読んだ時には象形文字に酷似した文字が記述されていたのだが、那兎が読む時にはしっかりと日本語で記述されている。恐らく所有者以外には解読出来ない仕組みにされているのだろう。この事が原因で結局2人の間に溝が出来たまま家族会議は終了し、兎羽是那兎が話しかけても口を聞いてくれなくなった。

飯に言葉を発したとしても聞こえて来る言葉は必ず一言“変態”だけだった。

不幸中の幸いか、猿兎だけは那兎の話を信用してくれたのでうーちやんは何とか兎耳山家から追い出されずに済んだ。

とは言え急に子供が1人家族に加わるとなれば、今後色々な課題をクリアしなければならない。

家族会議終了後、那兎はうーちゃんを自分の部屋に招き入れ言葉を話せるかどうか試す。

だがやはりと言うべきか彼女は一言も喋らず潤んだ瞳で那兎に擦り寄るだけだった。

尤も普段美少女と縁が無い那兎にしてみれば言葉等無くても十分過ぎる程幸せで、人間になったうーちゃんに対して俗に言う一目惚れをしてしまっていた。

「えへへ…モフれなくなったのは残念だけどこれはこれで良いね。」

「…」

「那兎…朝ご飯出来たよ」

「うん、今行くよー」

猿兎に呼ばれた那兎はうーちゃんの手を引いて1階のリビングへ移動し席に着いた。

今日は家族会議が行われた所為で少し遅めの朝食である。

卓上にはごはん・味噌汁・納豆・焼き魚等々の和食が並び、うーちやんは初めて食べる人間の食事に興味津津の様子で長い耳をぴくぴくさせている。

流石に元は兎でも体は人間なのだから牧草を食べさせる訳にもいか

ないだろう。

那兎達が息を飲んでうーちゃんの反応を覗いていると彼女は器用に箸を握り食べ始めあつと言う間に卓上に置かれたおかずを平らげ、啞然とする猿兎の前に茶碗を差し出し何かを訴えかけている。

「……」

「え？…あ、おかわりね…」

那兎は人間以上に人間らしい行動をするうーちゃんを見ている中に本当は喋れるのではないかと疑念を抱き、事の真偽を確かめる為に朝食の後に彼女を連れ近くの映画館へ赴く。

と言うのもそう深い理由は無く唯自分が観たいホラー映画があつたからであり、それを観せれば怖がつて無意識に悲鳴ぐらいは上げるだろうと考えたからだ。

那兎はうーちゃんと一緒に最前列の席に座り、そわそわと開演を待つ。

当然うーちゃんの長い耳は後ろで観る客の迷惑になるので、那兎は彼女の耳を前に畳んでファー帽子を被せおいた。

当の本人は事情を知らない事も相俟って少し怪訝な顔をしながらポップコーンを頬張っている。

「そんな顔しないでよ…僕だつて態とやってる訳じゃないんだからさ…」

「…むう…」

ご機嫌斜めのうーちゃんを那兎が必死に宥めているとブザーが鳴つた後に場内が真っ暗になり、スクリーンに映像が投影され映画が始まる。

意外にもうーちゃんは動揺せず冷静に映画を静観している。

そして物語の中盤に差し掛かった頃、主人公の女優が振り返ると背後に不気味に笑う幽霊がいるシーンに恐怖した那兎は発狂し気絶した。

それから映画が終幕して場内が明るくなり、瞼の裏に眩しい光を感じた那兎は目を覚ます。

目を開けた視界の先にはうーちゃんが心配そうに彼の顔を覗き込んでおり、自分の置かれた状況を理解した彼は肩を落とし彼女を連れて映画館を出た。

映画館を出た後、何だか帰宅する気にもならず2人は公園のベンチに腰掛けた。

那兎は高がフィクションの物語で気を失った自分を情けなく感じており、しかもそれを愛しのうーちゃんに見られた相乗効果もあり完全に関が折れている。

そんな彼に愛想を尽かしたのか、うーちゃんは真剣な眼差しで何処かへ行ってしまう。

と、思えば数分後には慌てて那兎の元へと駆け寄って来た。

俯く那兎が前を見上げるとうーちゃんは両手にアイスクリームを持って微笑んでおり、彼女は無言でその片方を彼の手に渡す。

実は2人が出掛ける前に猿兎の計らいでうーちゃんはお小遣いを受け取っていた。

「うーちゃん、これ僕にくれるの…?」

「…はい、うー是那兎さんが落ち込んでると寂しいのです…だからこれ食べて元気になって欲しくて…」

「良かった、やっぱりうーちゃんは喋れたんだね！君の声が聞けて僕凄く嬉しいよ。」

うーちゃんの優しさに那兎は感激して思わず涙ぐむ。

本人曰く、今まで何も語らなかったのは単に気まずさと恥ずかしさがあったかららしい。

好意に甘え美味そうにアイスクリームの味を堪能している那兎をうーちゃんは羨望の眼差しで見つめ、もじもじと何か言いたそうな顔をしている。

それに気付いた那兎は首を傾げながら自分のアイスクリームをうーちゃんに渡そうとすると、彼女は赤面し耳をぱたと前後に振った。

「あ、ごめん。てつきり欲しいのかなーって思ったんだけど…僕が舐めたアイスなんていないよね。」

「えっ、そうじゃなくて…うーは那兎さんの…その、抹茶のアイスの味見がし、しししいたいのです!」

「…良いよ、でもその代わり…君のチョコミントを僕に味見させてね?」

「これって間接キ——じゃ、じゃあ取替えっこするです!」

2人が互いのアイスクリームを交換しそれぞれ違う味を楽しもうとした矢先、突然草陰から小柄な狐が飛び出しうーちゃんのアイスクリームを啜って逃げて行った。

折角勇気を出して那兎に譲って貰ったのにも関わらず、ほんの一瞬で狐に泥棒され無性に悲しくなったうーちゃんはまるで赤ん坊の様に泣き喚く。

その泣き声は周囲の通行人に那兎が彼女を泣かせたのではないかと誤解させてしまう程だった。

止むを得ず那兎は自分の、元いうーちゃんのアイスクリームを渋々返してあげると彼女はぴたりと泣き止み潤んだ瞳で彼を見つめる。

「な、那兎さん…もしかしてこれ…うーにくれるのですか?」

「まあもう十分励まして貰ったからね。だから今度は僕が励ます番だよ。」

そう言つて那兎はうーちゃんの頭を優しく撫でる。

この瞬間、唯の飼い主に過ぎなかった那兎はうーちゃんにとって今まで以上に特別な存在へと変わった。

勿論那兎も同じ気持ちだった、だが彼は本当に擬人化した兎に対してそんな感情を抱いて良いのか分からず苦悩していた。

思い立ったが吉日と、うーちゃんは那兔に自分の気持ちを伝えるべく緊張した面持ちで口を開く。

だがその時、先程の泥棒狐を抱き抱えた女性が2人の前に現れるなり何度も頭を下げた。

彼女の名前は狐森左近こもりさこん——黒髪ショートヘアの妖艶な着物を着た和装美人で、旅館の若女将を務めている。

そして左近に抱き抱えられている狐の名前は稲荷いなり——道端に衰弱して倒れていた所を左近が保護して以来、彼女が務める旅館の看板娘ならぬ看板狐となった。

2人はまるで状況が飲み込めず目を点にして左近を凝視していると彼女は徐に手提げ鞆から2枚の紙切れを取り出し那兔に渡す。

紙切れには“旅館うたかた荘 一泊二日御招待券”と記述されており、益々2人は状況が飲み込めなくなり困惑した。

「うちの稲荷がご迷惑をお掛けした様で…お詫びと言ってはなんですがお時間がある時にここに書かれた所へいらっしゃってください。私そこの旅館で若女将を務めている狐森左近と申します。」

「いえ、とんでもないです…何もここまでして頂かなくても…」

「ここで出会えたのも何かの縁、遠慮なさらず受け取ってくださいな。では、お待ちしておりますので。」

左近は2人にお辞儀をして淑やかに去り、うーちゃんはその後ろ姿に見惚れる那兔に告白する気が失せ肩を竦める。

そんな事とは露知らず那兔が薄気味悪い笑みを浮かべながら稲荷と戯れる妄想をしていると、ポケットに入った携帯電話のメロディが

鳴り彼を現実に取り戻す。

着信は猿兎からで、直に夕飯の時間なのでそろそろ帰って来て欲しいと言う主旨の内容だった。

確かに辺りを眺めてみれば陽が落ちかけており、時々吹き荒ぶ風が肌寒く感じられる。

那兎は寒さに震えるうーちゃんを見兼ねて自分の上着を着せた。

「わぁ…温かい…それに那兎さんの匂いがするです!」

「匂い?…まあ良いや、お母さんが心配してるし帰ろっか?」

寒空の下2人は仲良く手を繋いで互いの温もりを感じながら帰路に就く。

その後、帰宅した那兎は夕飯を済ませ部屋で“擬人化のすゝめ”を読み耽る。

緑色のページを動物に食べさせれば人間の姿に変えられる事は立証済みだが、逆に元の姿に戻す方法はあるのか那兎はずっと気になっていた。

勿論那兎はうーちゃんにはずっと人間の姿でいて欲しいと思っているので仮に無くても問題は無い。

一方うーちゃんはテレビ番組を夢中で眺めくすくすと笑っており、自分の姿にはもうすっかり馴染みつつある様子なのだが。

“擬人化のすゝめ”の解説に倦み疲れた那兎が本を閉じ欠伸をしていると、見慣れない虎猫を連れた兎羽が部屋へと入って来た。

どうやら彼女はこの虎猫に“擬人化のすゝめ”を使わせて那兎の言っている事が嘘か真か確かめるつもりらしい。

兎羽が連れて来た虎猫の名前はわんふー——兎耳山家の近所に住む猫俣虎子ねこまたとらこという老婆が飼っている雌猫で、偶に兎耳山家に現れては餌をお強請りして帰って行く自由奔放な飼猫である。

兎羽は虎子に駄目元で“擬人化のすゝめ”の事情を話してわんふーを借して欲しいと頼んだのだが、意外にも快く了承してくれた。

それは虎子が近所でも評判の親切な人物であるのもそうだが、何より本人が人の姿になつたわんふーの姿を見たいと言う好奇心があったのだ。

だが問題が一つある。

動物を人の姿に変えられる緑色のページはうーちゃんが食べてしま
い今の“擬人化のすゝめ”は単なる怪しい古文書に成り下がってしまっているのだ。

「さ、お兄ちゃ——変態。わんふーを人間にしてみてよ？そしたら
変態って呼ぶの止めてあげるから。」

「参ったなあ…もうあのページ使っちゃったから無いんだよ…あれ？」

無理難題な要求に那兎が困り果てながら“擬人化のすゝめ”のページをぺらぺらと捲っていると、何故か失われた筈の緑色のページが元通りになっている。

これにより先程の口述が出来なくなった那兎は嫌々緑色のページを細かく刻んでわんふーに食べさせたがやはり直ぐには変化は現れないのか、わんふーは後ろ足で痒くなった頭を掻くだけ。

その様子を見た兎羽は軽蔑の眼差しで那兎を見つめた後、去り際に“変態”と吐き捨ててわんふーと部屋から出て行った。

すると直ぐにまた部屋の扉が開きバスタオル1枚巻いただけの格好をした猿兎が2人に呼び掛ける。

「お風呂上がったわよー2人共一緒に入って来たら？…なんてね、冗談よ冗談。ふふ…」

「もうお母さん、そんな格好でうるつかないでっいつも言ってるじゃないか。うーちゃん、先にお風呂入って来て良いよ？」

「——那兎さんと一緒にお風呂…那兎さんと一緒に…はうっ！じゃ、じゃあ行つて来るのです！」

「？変なうーちゃん。」

翌日、穏やかに添い寝する那兎とうーちゃんは兎羽の悲鳴で目を覚ます。

2人が兎羽の部屋へ急いで駆け着けてみると、案の定人間の姿になったわんふーが全裸で眠っている。

彼女は短い金髪から猫耳、お尻からは長細い尻尾を生やし時々覗く八重歯がとても似合う少女になった。

それを見て赤面する那兎を取り敢えず部屋から追い出し、兎羽とうーちゃんは寝言を呟きながら眠るわんふーを優しく擦り起こす。

無理矢理起こされ不機嫌な態度を見せるわんふーに兎羽は机に置かれた手鏡を向ける。

暫らくわんふーは鏡に対して色々な表情をしている中にそれが自分自身だと悟り、シヨックの余り膝を落としてがくがく震えた。

「そんな…これがワイの姿なんて…」

「ごめんね、私の所為で人間の姿に——」

「うち、めっちゃ別嬪さんやん！？あーうちみたいな乙女を世間では絶世の美女っちゅーんやろな！ほんま我ながら惚れてまうわ！二ヤハハハハッ！」

「…」

わんぷーがハイテンションなお転婆娘になってしまった事に兎羽は内心とてもがっかりしていた。

那兎を嘘付き呼ばわりしておきながら結局自分が間違っていたのも理由の一つだが、何よりうーちゃんの様に大人しくて控え目な性格の女の子になって欲しいと望んでいたからだ。

見事に願望を打ち砕かれた兎羽は一方的に話し掛けて来るわんぷーを鬱陶しく思いつつ、うーちゃんと同じ要領で服を着せてあげた。2人の間にはそれなりの身長差があった為若干わんぷーにはサイズが小さかったが、それ程気にする素振りも無く無邪気に喜んだ。

「わんぷーさん、とっても可愛いです！」

「ニヤハ」せやろせやろ？那兎にも見せてこよーっと！」

「あつ、こら！——もう、お母さんに先に話しとかないと面倒な事になるじゃない……」

兎羽の制止も聞かずわんぷーは階段を駆け下り、リビングで猿兎と向かい合って食事をしている那兎に後ろから力いっぱい抱き付く。ふいに体を締め付けられた那兎は悶絶し飲んでいたお茶を猿兎の顔面に向かって盛大に吹き出す。

だが猿兎は怒り狂い那兎に説教する素振りも無く、席から立ち上がりタオルで顔を拭いて戻って来た。

確かに彼女が怒っていないと言えば嘘になるだろう、だが急に見知らぬ家の子供が自分の息子に抱き付いたとなれば説教等している場合ではなかったのだ。

「く、苦しい…死ぬ…」

「あの、どちら様…？」

「うちの事忘れてしもうたんか猿兎はん？——つちゆうてもこの体じゃ分からんわな？ワイや、いつも飯食わせて貰つとる虎猫のわんふーやがな。」

自分の素性を明かしたわんふーの堂々とした態度に圧倒され何の言葉も出ない猿兎が彼女の身体を一心不乱に隅々まで調べ上げていると、兎羽とうーちゃんが目を泳がせながらやって来た。

その原因はわんふーが猿兎と接触する前に事情を話しておきたかったのに既に手遅れだったからである。

言わずもがな、この日の兎耳山家の食卓は今までで最も賑やかになった。

それから時が経ち午後1時頃——兎羽とわんふー、序に那兎とうーちゃんの姿は奥ゆかしい日本家屋の前にあった。

ここはわんふーの飼い主である猫俣虎子の自宅で、那兎達はわんふーを人間の姿にしてしまった事を謝罪する為に訪れたのだ。

「兎耳山です。虎子さんいらっしゃいますかー？」

「ようこそおいでくださいました。お話は虎子様から伺っております。さ、中へどうぞ。」

那兎が玄関の戸を叩くと中から家政婦が現れ、那兎達を中へと招き入れる。

日本情緒溢れる客室間に通された那兎達は神妙な面持ちで正座しつつ虎子が現れるのを待つ。

当然わんふーは行儀良く待機出来る筈も無く、だらしなく兎羽に膝

枕して貰っている。

那兎はそれを真似してうーちゃんの膝に凭れ掛かろうと体を左に傾けたが、右隣に座る兎羽に耳を引っ張られた為に叶わなかった。

そうこうしている中に老婆が襖を開けて客室間に現れた。

彼女は啞えた煙管を口から離して煙を吐き、物珍しそうにわんふーとうーちゃんを観察しながら那兎達の前に座る。

この老婆こそ猫俣虎子——本年半寿を迎えたのにも関わらず全く衰えを感じさせない快活な女性で、16年前に他界した夫の莫大な財産を引き継いで悠々自適な毎日を送っている。

わんふーを飼い始めたのは去年の初夏、生後間もなく路上に捨てられ衰弱していた彼女を哀れみ家に持ち帰って介抱してあげたのがきっかけである。

名前の由来は虎子が足繁く通う中華料理屋、王虎ワンフーの餃子の焼き色と彼女の縞模様が何処となく似ていたので名付けられた。

因みに猫俣家ではわんふー以外にもフェレットやリス等の色々な動物が飼われており、皆いつも一緒にお昼寝する程仲が良い。

「なあ兎羽ちゃん、今日日の若い子はトサカに獣の耳を付けるのが流行ってるん？」

「い、いえ…この子達がその…人間の姿になった動物なんです。まさか本当に人間になっちゃうなんて思わなくて…ごめんなさい。」

「てんごどすえ。ほんまはうち“擬人化のすゝめ”の事知ってるさかい。」

「虎子さんはあの本を御存じなんですか!？」

虎子の口から思い掛けない一言を聞いた那兎は一步前に身乗り出して彼女に問う。

すると彼女は懷から真黒に焼き焦げた一冊の本を机の上に置き、ゆつくりと語り始める。

幼少の頃、当時飼っていた犬と浜辺で散歩をしていると怪しい本が波打ち際に落ちていた。

虎子はその本を手に取り表面に付着した砂を払うと表紙には“擬人化のすゝめ”と書かれており、読んでみると動物を人間の姿に変えられるという物だった。

子供ながらに疑り深かった彼女は誰かの手の込んだ悪戯だと決め付け持ち帰るだけ持ち帰って後は机の引き出しに放置していたが、ある日と竜司と名乗る少年が家に訪ねて来て本を返して欲しいと懇願する。

薄気味悪く感じた虎子は二度と来ないで欲しいと釘を刺し、きつぱりと断る。

だがその日から“擬人化のすゝめ”が無性に気になり勉強に全く身が入らなくなつた虎子は試しに愛犬チーズに緑色のページを食べさせた。

翌日、本当に人間の姿になってしまったチーズを親にどう説明するか困惑している虎子の前に再び竜司が現れる。

彼は手に抱えた本から赤色のページをチーズに食べさせると忽ち元の姿に戻り、虎子を仰天させた。

竜司曰く“擬人化のすゝめ”とは遙か古より伝わる禁忌の魔導書で、この世界の動物と平行世界に存在する獣人の肉体を入れ替える書物であるらしい。

この一件以降2人は親しくなり、やがて結婚するも竜司は“擬人化のすゝめ”に就いてはそれ以上何も語ろうとはせず19年前の大火災で不運な死を遂げてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2298z/>

僕のペットが擬人化したら。。。。

2011年12月17日06時01分発行